特別支援学級　国語科学習指導案

指導者　小出　哲也

展開場所　１組

１．単元名　人物になりきって読もう―――お手がみ―――

２．単元について

本単元は、通常学級１年生の教科書に載せられている「お手がみ」という教材の読み取りを中心として、児童が物語の中で楽しく作品世界を味わい、自分の持っている力を発揮して友達と考えを交流し合ったり、それぞれの音読の良さを認め合ったりする活動を通して、登場人物になりきった音読ができるようになることを目標に構成した単元である。

本学級は在籍７名、知的学級と自閉症・情緒障害学級で編成された支援学級である。１年男子１名・２年男子１名・２年女子１名・３年男子１名・４年女子２名・６年男子１名が在籍し、国語の学習には通常学級の２年男子１名と５年男子１名が参加して学習を進めている。通常学級に在籍する２名の児童は、支援学級に学籍を移行する過程の交流という位置づけでの授業参加である。

本単元は、１１月に行われる「〇〇〇フェスタ」という総合・生活科の発表会で行う「オペレッタ・お手がみ」の作品理解の学習と位置付けている。本単元の学習を通して「お手がみ」という作品の持っている世界を味わい、深い理解に立ってオペレッタに取り組むことを大きなねらいとして持っている。これまでの国語の学習は、学級全体で行う読み聞かせを中心とした「全体学習」と、個別の課題に合わせて編成したグループ学習を取り入れ４５分の授業を構成してきた。本単元では、初めからグループに分かれて学習する形態を選択した。音読や読み取り、言葉での意思の疎通にそれほど問題のない子どもたちと、作品の世界を深く味わい、宮野木フェスタに向けたオペレッタづくりの学習に生かしていきたいと考えた。

本単元で扱う教材「お手がみ」は、アーノルド・ローベルのシリーズ作品の中の一作である。主人公である「かえるくん」と「がまがえるくん」は、仲良しの友達である。いつも一緒に行動し、いろいろな事件に遭遇していく。手のかかるがまがえる君と、世話好きなかえる君が楽しいやり取りをする中で、心を通わせていくお話がたくさん語られている。

「お手がみ」は、「ふたりはともだち」というシリーズに載せられた作品で、前述の通り１年生の教科書に長く採用されている。描かれている主題は「本当の友達とは…」という深いものであり、「手紙をもらう」という経験を通して「相手を思いやること」や「伝えるという行為」について深く考えることができる作品である。物語の展開の中には、自分が相手に手紙を出していないことを、言われてはじめて気づく場面や、急いで渡したい手紙をはやくは移動できないかたつむり君にお願いしてしまう場面など、滑稽なやり取りが頻繁にあらわれる。シリーズ全体を通して描かれる二人のやり取りの滑稽さを味わいながら、そこに流れる「心の純真さ」を大切に読み進め、登場人物の心に触れていきたい。

本学級の児童は物語の音読を好む児童が多く、読み取った内容を工夫して音読することに自信を持っている児童が多い。その力を最大限に生かして、読み取りや話し合いの活動を楽しく進めていきたい。児童の感じ取った人物の心や、場面に描かれている情景について、多様な音読表現でさらに深く感じ取っていく展開をしていきたいと考えた。かえる君とがまがえる君の間に流れる暖かい空気が、教室に充満していくような授業を作り上げていきたいと思う。

３．児童の実態

本単元の学習に参加する６名の児童は、日常のやり取りが平易に進められ、言葉での内容理解もそれ程問題のない児童である。平仮名はほぼ問題なく読むことができ、登場人物の感情についても、自分なりに想像することができている。友達の考えに感想を持ったり、友達の考えから自分の意見を組み立てたりすることも、できるようになってきている。そういう一人一人の力を響き合わせて、作品の持っている世界に深く入り込んでいくことが課題となるグループであると考えている。一人一人の細かい実態に関しては、以下に記載する。

学年・性別・検査結果	本単元に関する児童の実態
Ａ２年男子 IQ　９１ SQ　７２	２年生から支援学級に学籍を移した児童である。入学前から、保護者は学籍をどこに置くか迷っており、通常学級で頑張ることを選択したが、不登校の傾向があらわれ、移籍を決断された。交流しはじめの頃は、声も小さく自己表現するのを恥ずかしがっていたが、クラスの上級生の様子を見て、生き生きと自分を出して学習に参加するようになった。音読に関しても、文字を目で追って読むことができるようになり、読み取った内容を工夫して表現しようと努力しはじめている。
Ｂ２年男子	２学年の前期後半から交流学習に参加するようになった児童である。交流しはじめの頃は文字を目で追うことができず、支援にあたると「一人でできますから!」と支援を嫌がる様子が見られた。平仮名の習得もあやしく、音読も覚えている内容で文を作ってしまう傾向がみられる。心の傷に配慮しながら、自信をつけることが課題の児童である。
Ｃ３年男子 IQ　９７ SQ　８２	３年生から学籍を移した児童である。友達との関係がうまく取れずに、いらいらと怒ることが多く、登校しぶりがあらわれ支援学級に移籍してきた。２年生後半から交流で学習には参加しており、支援学級の学習の流れには慣れている。上級生の音読の巧みさに多くのことを学び、自分の音読を工夫しようと努力している。音読に対しての自信を持ちはじめており、大きな声で音読することが多くなった。語彙も豊富で、話し合い活動の中でよく考えた意見を発言する。
Ｄ４年女子 IQ　８９ SQ　５１	アスペルガー症候群の診断名を持っている児童である。１年生から支援学級に在籍し、行動面での問題を改善してきた。学習に関してはあまり問題がなく、人物の内面についても考えることができる。読み取りが一面的で、パターン化した思考をすることが多いので、友達の考えに注目するよう働きかけ、思考を揺さぶっていくことが必要な児童である。音読に関しては、大きな声は出さないものの本人なりに工夫して、人物の感情をあらわそうと努力するようになっている。
Ｅ５年男子	３年生から交流学習に参加し始め、家庭の事情で移籍することができない児童である。友達との関わりには問題がなく、通常学級でも生活することができていたが、学習内容が分からなくなり不登校傾向が見えてきたことから、学習を支援学級で受ける形の交流を進めてきた。５年生より生活の中心を支援学級に置き、給食だけ自分の学級でとる形での生活をはじめている。音読に関しては大きな自信を持っており、学級の友達の手本となり、話し合いの中でもよい意見を出している。
Ｆ６年男子 IQ　７３ SQ　７３	５年生から本人の「やり直したい!」という訴えを保護者が聞き入れ、学籍を支援学級に移した児童である。日常生活に関しては、言葉の指示で進めることができる。友達の視線や言動に対して、自分の思い込みで反応してしまうことが多く、過激な言動をしてしまい、通常学級の児童とのトラブルを起こしていた。そういう関わりの中で、通常学級での孤立感を深めてしまい、移籍を訴えるようになった。移籍後は本人なりに努力をして、通常学級の友達との関係も改善されてきた。もともと、知的な理解力が高く語彙も豊富であるため、気持ちが前向きの時にはみんなを驚かせる発言をする。登場人物の気持ちや場面の様子を深くとらえた音読をすることができる。

４．研究主題とのかかわり

楽しい授業を作るための支援・指導の工夫

○児童の実態に合わせたテキストの作成

「お手がみ」はアーノルド・ローベルの作品で、三木卓氏が訳した本が発行されている。原作には１０枚の挿絵が添えられ、横書きの本の形で発行されている。本学級の児童には、これまで絵本をそのままテキストとして使う形で学習を進めてきた。本単元では、挿絵を使い場面をわかりやすく構成したテキストを作ることを考えた。文章を縦書きになおし、1ページに甘い挿絵を入れ、読み取りの手助けとなるテキストを作ることを考えた。交流しはじめの B 児や、視力が落ちてきている D 児が、負担なく読み進められる文字の大きさを選択していきたい。

○発言や音読に込められた読みを生かす。

児童が学習中に発言することは、要領を得ない内容であることが多い。しかし、発言する内容は、教師の発問や、文章のどこかからイメージを湧き立たせていることが多い。児童の発言のそこにある問いを、教師が読み取るために大切になるのが「教材の解釈」だと考える。一読して分かったつもりにならず、教師自らが問いを発見する姿勢で文章に向き合い、物語の持っている世界と深く対面したうえで、授業に臨むように心がけたい。できる限りの準備をし、児童の発言の奥底に触れ、響き合わせることで、一人一人の発言が生かされ深い考えが生まれるような展開を作り出していきたいと思う。

○読み取った内容を生かした音読

授業展開の最後のほうに「音読表現」をする時間を作っていきたい。その時間読み取った登場人物の思いや感情を「音読練習」する時間を毎時間積み重ねていく。これまでの学習でも進めてきた展開であり、児童は楽しく取り組めるのではないかと考えた。一人一人が読み取った内容を、一人一人で工夫して音読練習することで、一人で音読するときに自信を持って表現することができるのではないかと考えた。自信をつけた状態で音読表現をし、それぞれの音読の良さを確認しあい、自信をさらに高めていきたい。5・6 年生の児童が友達の音読表現の良さを感じ取れるようになってきているので、その力も活用し一人一人の満足感を生かす学習を進めていきたい。

５．単元の目標

○友達と一緒に楽しく学習できる。
○「おてがみ」の面白さを感じ取ることができる。
○人物や場面の特徴をとらえて音読することができる。
○挿絵から人物の気持ちを想像することができる。
○友達の発言や音読の良さを感じ取り、発言することができる。(E 児・F 児)
○友達の音読の良さを感じ取り、自分の音読に取り入れることができる・(A 児・C 児・D 児)
○音読に対する援助を、快く受け入れることができる。(B 児)

６．指導計画（１７時間扱い）

第１次　絵本の読み聞かせを通して、物語のあらましをとらえることができる。・・・(3)

・　絵本の読み聞かせを聞き、感想を持つ。
・　大型紙芝居を使って場面わけをし、物語の流れをつかむ。
・　場面ごとに小見出しをつけ、あらすじをまとめる。

第２次　それぞれの学習課題に合わせて場面ごとに読み深め、音読表現する。・・・・(9)

・　ページ１…がまがえる君の悲しそうな様子に気がつくかえる君。・・・・・・・本時
・　ページ２…悲しい気持ちで玄関の前に腰を下ろすかえる君とがま君。
・　ページ３…いいことを思いつき、急いで家に帰るかえる君。
・　ページ４…大事な手紙を、かたつむり君に頼むかえる君。
・　ページ５…ベットで寝ているがま君を起こそうとするかえる君。
・　ページ６…あきらめているがま君を説得しようとするかえる君。
・　ページ７…がま君を怒らせてしまうかえる君。
・　ページ８…がま君に本当のことを話してしまうかえる君。
・　ページ９…幸せな気持ちで玄関で手紙を待っている、かえる君とがま君。
・

第３次　読み取った内容をもとに音読練習をし、音読ビデオを作る。・・・・・・・・(5)

・　この物語が伝えてくれていることについて話し合い、感想を交流する。
・　場面ごとに分担して、読み取った内容が上手く表れるように音読練習する。
・　大型紙芝居を使いながら、まとめの音読をビデオで録画する。

７．本時の指導（４／１７）

（1）　目標

○　楽しく学習に参加することができる。
○　がま君とかえる君の気持ちをとらえて音読することができる。(A･B･C･D 児)
○　わからない言葉について意味を考えることができる。(A･C･D･E･F 児)
○　友達の発言や、音読の良さを指摘することができる。(E･F 児)
○　教師の支援を、快く受け入れることができる。(B 児)

学習活動と内容	教師の指導・支援	教材・教具
１.はじめの挨拶をする。	○気持ちが集中できるように声をかける。 ○本時の学習内容について話をする。	
げんかんの前であう、かえる君とがま君の気持ちを考えて音読しよう。		
２.ページ１の読み聞かせを聞き、わからない言葉について考える。 ・「一日のうち…」ってどういう	○児童が「分からない言葉」として出された言葉について、みんなで話し合う。児童の考えを聞きあったり、例文を作ったりして、言葉のイメージをとらえやすく導く。	大型紙芝居

いことかな。 ・「つまり」ってどういう意味？ ・「ふしあわせな」ってどういうこと？	○E 児や F 児の発言を中心にしながら、児童のやり取りが深まっていくように導く。	
3.かえる君とがま君の気持ちを読み取る。 ・かえる君はどうして「悲しそうだね」って言ったのかな・ ・がま君の顔が泣き顔だったんじゃない？ ・いつもと違う顔してたんだよ。 ・がま君は、何が悲しいのかね。 ・手紙を待っている時間だからだね。 ・手紙待ってるのはかなしくないよ。	○がま君の様子を見て、いつもとの違いにぱっと気がつくことから、かえる君とがま君の仲の良さに気がつけるよう、話し合いを進める。 ○悲しい気分で、ふさぎ込んで答えているがま君と、がま君の様子に驚くかえる君の気持ちの違いを、拡大挿絵を使いながら明確にする。	かえる君とがま君の拡大した絵
4.読み取った気持ちを、伝わるように工夫して音読練習する。 ・かえる君が驚いているように音読しよう。 ・がま君がうんと悲しんでいるように練習しよう。	○音読練習する前に、二人の気持ちの違いを確認し、その違いが感じ取れるように、なりきって音読することを伝える。 ○B 児を中心的に支援に当たり、うまく読めている場面を称揚し、自信が持てるように声をかける。	テキスト
5.音読発表をする。 ・最初は僕が音読するよ。 ・A 君のがま君は泣きそうな感じがしたね。 ・B 君は、文字を抜かさずに読めてたよ。	○発表したい気持ちを揺さぶりながら指名し、児童のやる気が高まるように支援する。 ○かえるくんやがまくんの会話文の音読の中で、二人の気持ちを感じ取り、なりきって音読している児童の読みを取り上げ、良さを指摘させながら発表の良さを認める。	
6.本時の学習を振り返り、次時の学習について確認する。 ・今日はがま君の悲しい気持ちが上手く読めたね。 ・明日は、悲しいわけの所だね。	○読み取ったことをもとにして、かえる君とがま君になりきって読めたことを称賛し、次時「かなしいわけ」について読み取ることに触れ、児童の意欲を高める。	